

わくわく国際交流

深川国際交流協会 広報誌 Vol.2 (年末号) 1997.12



交流は普段着で

— 質素で、本音で、そして世界を知ろう —

深川国際交流協会 理事長 小滝 聡

グローバルに考えよう

「ゴルファーの喜ぶ声。スキーヤーの嘆く声」が聞こえてきます。11月というのに異常なほど暖かい日が続いています。これも地球温暖化の影響であろうかと心配している人は私だけではないはず。もっとも気象を研究している人達の中には、この「温かさ」も過去の気象変化の範囲内で、何も異常ではなく、二酸化炭素だって温暖化の元凶と判断するにははまだ早すぎる、と考えている人達もおります。ことの真偽はともかく、私の短い経験では確実に我々の気候は温暖化の方向に進んでいるような気がします。

3年前にインドネシアを1週間程旅行する機会がありました。パリ島の山の方に出かけたときのことで。「テラス・ビュー」という観光地がありました。山の上から眺望する所だろうと思い込んでいた私は現地に着少し少々驚きました。テラスとは棚田のことで、急斜面に作られた水田がパッチワークのように山全体を覆っているのです。人間様がなした技とはいえ、これは見事です。その時は稲の裏作で何やら野菜のようなものが植えられておりました。

でも、その後よく考えてみると、少々恐ろしくなりました。かつてこの山は熱帯雨林であったのでしょうか。その中には鳥たちが住み、動物たちが駆け回っていたでしょう。その森がごとく切られ、開発と称して農地化され、人工的に水を汲み上げ稲作を行っています。その木を切ったのは日本を

先頭とする先進工業国集団でした。1970年代、インドネシアのジャングルは切られました。そして、現在はマレーシアの森が伐採の対象となっています。

素人目にも、こうした行為が環境に大きな影響をもたらすことがわかります。この地球上の遠いところでの出来事が我々の日常生活に大きな変化をもたらすほど地球は狭くなり、我々人類が行う諸活動に対する許容量が減少しつつあります。

拠点を作ろう

私は国際交流協会の大きな任務はこの地域の人々と世界の人々を深く結びつけることにあると考えております。つまり橋渡しの役割を担うということです。地域の人々が協力し合いつつ他の国々の人達とお互いの文化を知り、意見を交換し、様々な地球規模の問題解決の糸口を見つけ出すきっかけ作りの役割があると考えております。

しかし、こうした深い交流も一朝一夕に出来上がるものではありません。どうしても交流の「蓄積」が必要です。世界を視野に入れつつも、やはり日本のおかれた位置から環太平洋、いわゆるパシフィック・リムを念頭に置きつつ、交流の展開を計ることが大切だと考えております。少々くどいようですが、他の地域との交流を拒否するといった態度ではなく、視野は広げつつも、ある程度的に絞った交流がなされなくてはなりません。

実績と経過

その意味で交流の拠点作りは大変大切でしょう。幸い深川市には拓大という国際交流にこれまで積極的にかかわってきた機関があります。これまでの交流でも中国、アメリカ、ブラジル、東南アジアの国々、そしてカナダと広範囲に渡っております。なかでもカナダとの交流は継続的に行われ、1990年以來、拓大側から派遣した学生数は60名以上、教員は半数以上の方が、姉妹校のフレイザー・バレー大学で研修を行っております。またその研修団には深川市民の方も参加され、学生と一緒に現地でホームステイをしながら交流を深め、そのお付き合いは今も続いております。

またカナダからも94年にはアボツフォード市議会議員のリー女史を団長とする一行16人が深川市を訪れ、深川市民宅にホームステイをしながら交流を行い、毎年の行事として定着しつつあります。そして、今年は拓大からの研修団のほかに、市内中高生と市長を団長とする各界代表者がカナダを訪ね、今後の交流継続を確認しました。

こうした交流発展に刺激され、カナダのフレイザー・バレーに住む日系人の方々が、日系人協会を組織し、自分たちの文化に誇りを持つとともに、日本との交流を積極的に進めようと動きだしました。実に喜ばしい限りです。

この地域は交流相手としてこれまでの実績から判断し、最良とまでは言えなくとも、適格であることには間違いないでしょう。

相手の条件

交流相手とするには、いくつかの条件があるように思います。その第一は、異文化に対して寛容であるかどうかでしょう。かたくなな排他的社会はこれからの教育、文化、経済交流を想定

した場合、不向きです。第二は治安状況です。これも、これからの市民交流、青少年交流を考えると大切でしょう。第三は、深川市との社会環境、自然環境の共通性でしょう。そして、最後に背伸びしないでお付き合いができるかどうかです。「どちらかが無理した」交流は長続きしません。実質的な交流はお金をかけなくてもできるものです。現在であれば、ファックスやEメ

ールもきわめて有効な交流手段として安価で有益です。何も派手な記念品の交換や記念パーティーなんか必要ではありません。普段着のほうがお互いの理解が深まり、お互いの感動を呼ぶものです。私たちの本当の姿を見て欲しいし、彼らの本当の姿も見たいものです。

写真は11月7日に開催された国際フレンドシップフォーラムの様子です。

✍️ 今回の年末号では、青少年海外派遣事業(カナダ)交流団員の交流を終えた感想が中心になります。

【1997年度青少年海外派遣事業の概要】

1997年7月30日から8月12日の行程で、青少年海外派遣事業が実施されました。交流団員は8名の中学生・高校生と2名の引率者で構成され、カナダを訪問しました。

月日	主な研修内容
7.30	◎ 出発～バンクーバー国際空港へ
7.31	◎ 英語で遊ぼう・チリワック市街見学
8.1	◎ 英語で遊ぼう
8.2～4	◎ 英語で遊ぼう・カルタス湖見学
8.5	◎ ホストファミリーと過ごそう ◎ 英語で遊ぼう
8.6	◎ バンクーバー市内見学
8.7	◎ ウォータースライド ◎ 英語で遊ぼう
8.8	◎ ホストファミリーと過ごそう
8.9	◎ 英語で遊ぼう
8.10	◎ ハットゼイック湖キャンプ
8.11	◎ ピクトリア市内見学
8.12	◎ さよならパーティ ◎ バンクーバー国際空港出発 ◎ 深川へ～帰着式

《交流団員》

交流団：三谷直美(高3)・木村詩織(高1)・森井千夏(中3)・河野志保(中2)
藤田裕輔(中2)・成田祥子(中2)・柿島麻希(中2)・野原裕憲(中1)
引率者：高橋保之・森岡千香



一生の思い出に

三谷 直美 (深川西高等学校 3年)

私にとってカナダでの2週間は、一生忘れることのできない思い出です。初めての海外旅行、初めてのホームステイなど、すべてが初めての経験で、いろいろと戸惑いもありました。

カナダでは、地元の中学校でちょっとした授業を受けたり、ホストファミリーと過ごしたり、現地で研修の企画を立てて下さったカールトンさんと派遣団10人でビクトリア一泊旅行をしたり

と様々な日程の中、2週間という長いようで短かった2週間を過ごしました。この中でも、ホストファミリーと過ごした週末3日間は、ハードな日であったのと同時に、とてもためになった日々でした。1家族に2人ずつホームステイしていましたが、日本語よりもやはり英語を使わなければいけなく、日常生活をずっと外国語を使い、聞いて過ごすのは容易なことではないと痛感させら

れました。時には、「大勢の日本人に会いたい」という思いもありました。ですが、ホストの人達が私達にわかりやすく、ゆっくり話してくれたり、ボディーランゲージも含めて、最低限自分の伝えたいことを相手に理解させることができました。人とのコミュニケーションをはかるためには、言葉は欠かすことのできないものだと思改めて感じました。

親からひとこと

三谷 邦夫

日本の政治・経済など、あらゆる方面で国際的感覚を持った人が要求される時代です。

自分の住んでいる国(日本)の生活・文化・習慣などを、真に理解するには外(外国)から見るのが一番良い方法だと思います。

国際交流カナダ派遣の貴重な体験を忘れることなく、大きな視野の大人になってほしい。

また、深川市の青少年の夢実現に向け、来年度以後も1人でも多くの派遣実施を望みます。



私の中の成長

森井 千夏 (深川中学校 3年)

私はカナダに行ってきたたくさんの良い思い出、そして人との関わり、友達の大切さを知りました。カナダに行く前の不安や期待・心配なことも、皆が協力できたからこそ無事に研修をしてこれたのだと思います。森岡先生や高橋さん、そして団員の皆にはたくさん迷惑をかけてしまったと思います。

私の中で、一つ成長したことがあります。英語が上手くなったとかではありません。気持ちの問題です。英語を通じて「YES」「NO」をはっきり相手に伝えることができるようになりました。

つまり、自分の意見や思っていることを伝えられるようになりました。今の現状でいじめがありますが、このいじめの原因の一つに、相手の思いどおりに行動したり、いじめられたくないという思いのために、自分の気持ちを押しさえたりすることがあると思います。私にもそんな経験がありました。でも、このカナダ交流を通じて、強い気持ちを持つことができました。しかし、私はもう一つ気が付いたことがあります。自分の意見を押し通すだけではいけないということです。カナダへ行ってきたのは私1

人ではありません。深川とは環境も違うし、言葉の違いや食事の違いなどいろいろあります。そのような中で生活していけば、当然問題も生じます。実際にいろいろあったかもしれないけれど、皆で協力し合えたことが一番うれしかったです。

来年、カナダへ行く人は、自分にしたいことをどんどん挑戦して、人との関わりを大事にしてきてほしいです。そして、この経験をこれからは活かしていかなければならないと思いました。

親からひとこと

「生は相近し、習いは相遠し」

森井 和雄

人間は生まれてきた時はみんな同じである。しかし、育つ過程で学んだことは生涯、身に付いて残る。

この度のカナダ青少年海外派遣参加の発端は、思えば10年ほど前にさかのぼる。当時、札幌に住んでいたイトコ(小学6年)が、札幌青年会議所主催の国際キャンプに参加し、英会話に夢中になりました。その後、そのイトコは英文科へ進み、大学在学中に1年間米国留学。

それは、娘にとってイトコはあこがれ、目標となりました。私ども親にとっては、この深川で国際キャンプなどはありはしない。時代は「国際化」「国際交流」など、言葉は耳慣れているけれど、この地域に住む次代を担う子供達に、そのチャンスやきっかけがどれだけあるのだろうか、少々悲観的に思っていました。

そんな中、この度のカナダ青少年海外派遣募集。親も本人も躊躇なく参加を申し込み、生涯にとって貴重な体験をさせていただきました。

国際交流協会の皆様はじめ、お世話いただいた皆様に心から感謝致します。

ありがとうございました。



貴重な体験

木村 詩織 (深川西高等学校 2年)

私が今年の夏休みに体験したことは、本当に貴重なものでした。

初めてのカナダ旅行、というより初めての海外旅行に、うれしさと不安でいっぱいでした。その中で、特に印象に残ったことをいくつか書こうと思います。

まず、一番長い時間を過ごしたホストファミリーとの生活について。いつもの日常生活を違う家で、違う言葉で、違う文化でやっていかなければなりません。初めは何を話せばいいのか、今何をしなきゃいけないのかさっぱりわからず、ホームシックにかかったこともありました。2週間の研修のうち、5日目くらいが一番つらくて、国際電話で親と話したら、もう半泣き状態でした。でも日が経つにつれて、ホストも私の気持ちを察してくれて、暖かく接して

くれました。一緒にどこかに行ったり、ゲームをしたり、スキンシップをしたりしていると本当の家族のように思えてきて、それがあたりまえようになっていました。そうすると、こっちも「日本」という国を知ってもらいたくなり、深川のことや、日本語を教えてあげたりしました。そんな風に親しくなると、今度は別れるのがつらくなり、しっかり HUG をして帰ってきました。私のホストファミリーは、今でもやっぱり、私の家族だと思っています。

次に驚いたのは、人々の視線についてです。日本は単一民族国なので、外国人が歩いているだけで、その人にくさんの視線を向けます。私がカナダに行く前までは、自分が今度は外国人の立場で、変な視線を感じるのだろうと覚悟していたのに、そんなものは全

くありませんでした。というのも、カナダは多民族国家なので、様々な人種・宗教・文化を持って生活しているのです。だから私達など何も珍しくない、といった感じでした。でも、ある日街を歩いていたら、黒人に対しての人種差別のようなものに出くわしました。本当に驚きました。やはりカナダにも、まだまだ問題はあります。

今回の研修で私が得たことは、人種や文化を超えた友情はある。そして外国の本当の姿を自分の目で知ること、とてもすばらしく勉強になるということです。今、私は「またカナダに行きたい」と思っています。この気持ちをずっと大事にして、また機会があれば必ず行きたいです。

親からひとこと

木村 悦子

カナダ交流に参加させていただきまして、本当にありがとうございました。今まで、2週間という長い間、家から離れた経験も、海外へ行ったという経験もありませんでしたので、娘にとって、不安とうれしさの複雑な感情を、どう処理してよいかわからなかったと思います。パスポートの手配から、荷物の積み込みまですべて自分でやり、親を頼らずに段取りしていく姿を見て、うれしいやら寂しいやら、その点は娘と同じような気持ちを共有していたような気がします。そういうことで、行く前から自立し始めていたので、何の心配もなく送り出し、どんなふうにも成長して帰ってくるのが楽しみでした。私にとっての2週間はあっという間でしたが、娘にとっての2週間は、衝撃的なことばかりだったと思います。些細なことでは、ホストファミリーのママのお手伝いに食器を洗おうと思っていたのが、食器洗い機がありがたかった話や、地下があったり、家の広さやスーパーマーケットの大きさ、街の美しさ、自然のすばらしさなど、数多くありますが、この旅行で一番娘を変えたものは人との関わりです。帰ってきてからは、「外国人に会うと話したくなる」という言葉には驚きました。英語力はありませんが、国が違っても心で話せば通じるということを感じてきたのです。国際交流の方々のおかげで、良い人達の出会いがたくさんあり、娘の人生観を変えたこの旅行に、親子して深く感謝しています。



国際交流を終えて

藤田 裕輔 (納内中学校 2年)

7月30日に出発したカナダ国際交流は、12日間の長いようで短い研修でした。

僕達は、毎週事前研修を行いました。カナダに着くまでの電車や飛行機の中では、期待に胸をふくらませていました。

移動時間は20時間以上、時差は17時間でした。着いたところはカールトンさんの家、そこではたくさんの人に囲

まれて Welcome パーティーをしました。1日目から楽しく、そして不安も無く過ごせました。

それから10日間、学校に行ったり、湖で泳いだり、ショッピングをしたりして、たくさんの経験と思い出ができました。

いよいよ、お別れの日がやってきて、お世話になった皆さんと別れる時、僕は涙目になっていました。

とても短い期間だったのに、たくさんの思い出ができ、本当にうれしく思います。

親からひとこと

藤田百合子

7月30日、息子は12泊14日のカナダホームステイの旅に出発しました。当日、深川駅まで見送りに行きましたが、ほとん

どの子供達は、親達とより、一緒に出かける団員達との会話の方が弾んでいました。

(ホームに汽車が入り、楽しみに乗り込んでいく。)

ホームに残された親を振りかえるでもなく、まして手など振ってくれるはずもなく行ってしまいました。前だけを見て、これから先の不安より、期待に胸ふくらませての出発に見えました。

半月後、千歳空港まで、市が用意してくれたバスで迎えに行きました。さすがに疲れたらしく、帰りのバスの中ではたいした話もせず、眠ってしまう子供達が大半でした。

バスの中で、息子に「またこのような機会があれば行きたいか」と尋ねると、「行きたい」との即答。その一言で、行かせて良かったと思いました。

メンバーに決まり、帰ってくるまで、私にもいろんな不安がありました。言葉・食事・習慣・マナー、そして病気やケガ。海外旅行の経験の無い私には、アドバイスの言葉もありません。でも、出発までの2ヶ月、毎週行われていた研修会に、回数が増すごとに楽しそうに出かけて行く息子を見ていると、不安は少しずつ解消されていきました。

何より団員の皆さんと、とても仲良くなれたことが一番の成果で、私としても安心させられました。

3ヶ月ちょっと経った今でも、研修会でのことや、カナダで経験したこと、カナダと日本の違いなどを話してくれます。ホームスティ先へのおみやげを選ぶ時、カナダで披露するよさこいや歌を練習した時などは日本を、食事の違いや生活の違いで外国を、肌で感じたことで経験してみなければわからない多くのことを得たと思います。少し時間が経った今、本人の中で改めて感じているように見えます。

また、兄弟のいない息子にとって、一緒にホームスティした野原君や、ホームスティ先の2人の子供達との生活は、何より思い出になっていると思います。

息子にこのような経験をさせて下さいました深川国際交流協会、拓殖大学の先生、そして誰よりも、研修会から引率までお世話になった高橋さんと森岡さん、快く受け入れて下さったカールトン家の人々に心から感謝しています。

ありがとうございました。



ちょっとの自信

河野 志保 (納内中学校2年)

カナダに行って、私は前よりももっと、英語が好きになりました。授業中、カナダで覚えた単語が出てきたり、前よりも理解する力がついたと思います。「英語で話す」というだけで、頭の中が真っ白になったカナダへ行く事前研修の時、今もわからないことがたくさんあるけど、ジェスチャーなどで英語が

あまりできなくても、なんとか2週間暮らしてきたので、自分にとってちょっとした自信になっています。

また、自信になったのはそれだけでなく、カナダへ行っているいろいろなことを経験したのも、とてもプラスになったと思います。初めて1人で買い物したり、お店で注文をしたり、最初はすごく緊

張したけれど、最後の方は普通に買っている自分がいて、下手な英語だったけれど、私はそのことをすごくうれしく思います。

いろいろなことがあったカナダ研修、楽しい思い出・すごい経験。本当に行っただけよかったと思っています。また、もう1回行きたいなあ。

親からひとこと

河野 司美

部活や生徒会活動に参加し、その他のことにも多く興味を持ってやっていたのですが、今回のカナダ訪問も、また娘の“なんでもやりたがり屋”の一つとっていました。しかし、その夢が現実となったことは、本人だけではなく、私ども家族にとっても良い経験になりました。同時に、その責任の重さを感じているところです。

中学生では普通、その交友関係は校内だけにとどまる場所ですが、他の地域の友人が多くできて、一生お付き合いができることは、すばらしいことだと思います。この経験を多くの友人や後輩に伝えて、本事業が意義あるものとなるよう努力してもらいたいと思います。



夏の思い出

成田 祥子 (深川中学校2年)

私は今年の夏、カナダ交流団員としてカナダでホームスティをしてきました。ホームスティや家を長期間はなれるのは初めてで、いろいろ不安もありました。が、いろいろなることはあっても楽し過ぎてよかったです。

今年の夏の経験や体験は何にも変

えられない、言葉では言い表すことのできないものになりました。これは一生のうちで、もう無いかもしれないし、今のこの時でしかできなかった本当に貴重なことだったのかも知れません。

私の不安だったことその一は、「行きの飛行機で眠れるか」ということで

した。私は案の定一睡もできませんでした。その時は「今眠らなかったら、明日が困る。何かの途中で寝ちゃうかも。」と思い、落ち着きませんでした。カナダに着くと元気ができて何も困ることはありませんでした。その日は早めに寝たのですが、「けっこう自分

は体力(?)あるんだな。」と思いました。

サーディスは、深川のようなところだと聞いていましたが、思っていた以上素敵なおとこでした。学校も家も大きくて、新しくきれいだったのが印象的でした。トランポリンは多くの家があり、しかもすごく大きいのです。というのも、家々に大きな庭と遊具があるのです。深川ではあまり見られない光景だと思いました。

次に食事は、朝食はコーンフレークのみなどと、簡単に驚きました。昼食は毎日、お弁当を作ってもらいました。

夕食は私のホストの場合、自分でお皿にとって食べました。

カナダの食べ物は、日本より味が濃く、お菓子は特に甘かったです。でも美味しかったです。

それから、私の気づいたことの一つとしてパッチワークの物が多いと思いました。それはいろんな家庭で見られたので、「もしかして、カナダではパッチワークが盛んだったり、流行っているのかな?！」と思いました。

このように、いろんなことも発見できて良かったと思います。

忘れられないこともたくさんありま

す。特に、私はホストファミリーとのいろいろな出来事です。週末の別荘で馬に乗せてもらったことも、水上スキーみたいなものをやらせてもらったことも、本当に楽しかったです。

私の下手な英語を一生懸命わかってうとしてくれ、いつも暖かく見守ってくれたFamilyのことをずっと忘れません。そして、今回の研修も忘れることはないと思います。

親からひとこと 「カナダ交流団に娘が参加して」 成田 昭彦

「国際交流は大切なこと」と思っている、なかなか個人ではできないことです。この度の深川国際交流協会の企画は、子供達に貴重な意義深い経験の場を与えてくれました。

ぜひともこのような企画を今後とも続けて、次の世代を担う多くの子供達に国際感覚を身に付けてもらいたいものです。

ホームステイ先について一番心配なのは、その地域の安全性の問題ですが、カナダ、そしてチリワックは最適の土地でした。更にホストファミリーの方々ですばらしくて、家族中とても暖かく迎えて下さり、しかも、自然に普通の生活の中に入れてもらえたことが何よりでした。子供達が受けた親切や経験は、生涯忘れられないものとなるでしょう。

また、滞在中のいろいろな企画もすばらしいもので、楽しかったばかりでなく、学んだことも多かったはずで

最後に、企画・準備・滞在中・事後研修と、大変ご苦労下さいました深川国際交流協会の皆様、そして引率して下さいました高橋保之様と森岡千香先生に、心から感謝申し上げます。

私達父母も、こうした方々のお世話があって、子供達を安心して送り出せることができましたし、子供達にとって、とても実り多いホームステイとなりました。



「カナダに行って」

柿嶋 麻希 (一已中学校2年)

私は、初めてカナダに行って、本当にたくさんのことを学んだし、たくさんの友達ができました。この2つのことはカナダに行く前の事前研修などで、自分なりに目標を立てていたことでした。だから、目標を果たせたと思っています。

勉強になったことは、英語はもちろんですが、日常生活の面でも勉強になりました。

私がカナダに行って一番印象に残っているのは、ビクトリア泊旅行です。その中でもブッチャードガーデンはとてきれいでした。いろいろな種類の花がたくさん植えてありました。今までに見たことないようなところ

た。

次に、私がお世話になったホストファミリーはティム、パット、そして2歳半のクリスチャンの3人家族です。来年には家族が1人増える予定で、パットは家事も大変そうにみえましたが、私達のために一生懸命お世話してくれました。親戚のアマンダとテイラーが遊びに来た時に、私とパットでケーキを作り、その日はバーベキューをしました。

私と河野さんは、ティム・パット・クリスチャンにお礼の意味を込めて、日本から持って行ったお米と箸を使って、日本料理を作りました。その献立は「すきやき」でした。日本酒が無くて、白ワインを入れるはずでしたが、いつのまに

かビネガー(酢)になってしまい、家で作ったすきやきとは違ったけど、3人も喜んでくれました。

私がカナダで過ごした12日間は、きっと一生忘れないと思います。お世話になった人達や知り合った友達と、もっと交流を深められたらうれしいです。

最後に、お世話になった皆さん、本当にありがとうございました。

親からひとこと 「我が家のカナダ交流」 柿嶋 康男

カナダ訪問が決まった日から、我が家の「カナダに対する認識」が一変しました。娘は早速世界地図で、初めて耳にするビクトリア市やチリワック市など、訪問予定地の調査を開始。それにつられて弟も、百科事典で姉の情報収集に協力です。事前に渡された資料にあるホストファミリーへ、「我が家の紹介」をするために家族全員でホームページ制作にとりかかり、出発1週間前に何とか完成しました。また、生活情報や写真の交換にE-mailの活用など、カナダへの親しみと同時に、インターネット

の世界へも急接近しました。出発にあたっては、皆さんからのアドバイスに従っておみやげの準備や、滞在先で披露するための料理の予行練習など、すべてが娘にとって、かつて無いほど周到でした。また、帰国後の資料整理と総括についても、事後研修の指導の下で、大変丁寧に進められたように感じています。娘にとってのカナダ交流は、「我が家のカナダ交流」でもありました。

一般の国際交流で得た異国の知己や、行動を共にした仲間との親交、そして出発日の深川駅での輝くような笑顔などは、いずれも娘にとって貴重な財産となることでしょう。

お世話になった各位には心よりお礼申し上げます。



カナダでの研修

野原 裕憲 (一已中学校 1年)

今年の夏休み 7月30日～8月12日の2週間、僕達は太平洋の向こうカナダに行きました。そこでは2人ずつ、ホームステイしました。主に、近辺の地域の見学や、学校に行って英語の勉強をしました。

1～3日目くらいまではなかなか馴染めず、とても苦労しました。しかし、3日間のオフの日には、もうカールトンさんの家庭にも慣れ、とても楽しくなっ

ていきました。

だけど、楽しいことばかりではありませんでした。それは、ウォータースライドに初めて行った時でした。その日はカナダの有名なバンドが来るということで、ものすごい人でした。そこでクリスマスはライブに、僕達はウォータースライドに行きました。僕達は、その後1時間ほど遊んで9時頃に上がりました。しかし、クリスマスを見つけ、カールトンさん

が迎えにきたのは12時半近くでした。

しかし、そんなハプニングはありましたが、日本に帰る時には楽しい思い出しか残りませんでした。

僕にとってこの2週間の体験は、かけがいのない思い出になりました。本当に大変お世話になりました。Mr.カールトン、そして「カナダ」。

親からひとこと

野原 辰夫

この度の国際交流事業に裕憲が参加させていただき、関係者の皆様から心からお礼を申し上げます。5月中旬、申込書を持参して、子供から「参加させてほしい」と言われたのですが、正直、まだ無理だと思いました。まだ中学1年で英語力もあまり無く、仮に選ばれたとしても、カナダで十分に活動ができないのではないかと思います。しかし、裕憲の姉2人が昨年、オーストラリア・アメリカとホームステイを経験しており、いろいろ話を聞かせているようで、本人が行く気になっているようでしたので、やらせてみようと思いました。しかし、選抜試験に合格しなければ話にならないわけですが、周りの心配をよそに、本人はさほど緊張もせず、試験を受けられたようです。

無事、カナダ行きが決定し、いよいよ準備が始まりましたが、当の本人はのんきなもので、周りの方がハラハラさせられました。上の2人は、自分で何でもやってしまったので、安心して送り出せたのに比べ、裕憲がギリギリになってものんびりで、これで本当に海外に行けるのかと、少々不安になりました。しかし、事前研修の回を重ねるごとに、何でも自分でやるようになりました。友達もでき、一番年下だからという心配も消えました。(本人はそんなこと気にしてなかったようですが。)

あとは、英語がどの程度話せるのかが心配でしたが、実際に帰ってきてから本人に話を聞くと、けっこう話せていたようで、本人も満足していたようです。

カナダ滞在中は、1・2度電話をかけてきましたが、うまくやっているようでしたので、さほど心配しませんでした。帰ってきてからも、時差ボケと長旅で疲れているはずなのに、おみやげと思い出いっぱいのスーツケースを広げて、いろいろと話を聞かせてくれました。その話を聞いていると、やっぱり行かせてよかったと思いました。

このカナダで体験したことが、これからの生活のいろいろな面で活かされれば、と思っています。

国際化が進む社会の中でも、物怖じせず率先して、その中に入っていけるようになってほしいものです。

貴重な体験をさせて下さった皆様、本当にありがとうございました。そして、この交流事業をこれからも、ぜひ続けていってほしいと思います。

カナダのフレージャー・バレーってなに？

カナダ



～行って見てきたカナダ～

拓殖大学北海道短期大学保育科2年 堀池 剛

仕組まれたカナダ物語

今年の8月25日から9月13日まで、僕はCANADA 西海岸のBritish Columbia州はAbbotsford市という所にあるUniversity College of the Fraser Valley (UCFV)で語学研修を受けてきた。「研修」というと何か堅苦しい勉強ばかりの日々のように感じるかもしれないが、実際はCanadianに“JENGLISH”とからかわれる英語を駆使しての波瀾万丈の毎日であった。今夏我が拓大には、UCFVから4人のCanadianが留学していたが、そのうちの1人であるKeithの家に僕がHome Stayするように仕組まれた(首謀者不明)ことから既にこの物語は始まっていたのだ。

普段着で出発

日本時間の8月25日(月)朝は6時頃目が覚めてしまった。準備はすっかり終わっていたので、きっちり朝食をとってニュースを見ながら、のんびりと汽車の時間を待つことにした。海外旅行といえば、それなりに着飾って行くのが普通なのであろうが、僕は学校に行くのも街に行くのも「ジャージにサンダル」といういでだちなので、今回もそのスタイルで行くことにした。

成田までのフライトはあっという間であったが、そこでの待ち時間がなんと4時間程もあり、時間つぶしをどうするかで頭を悩ませた。とりあえず両替を済ませたり、本日2杯目のコーヒーを飲んだりしてみるものの、全然時間が過ぎないので、仕方なく本屋で立ち読みすることに。ふと周りを見回せば、当たり前のことだがジャージにサンダルというのは僕ただ1人。僕は心の中で「普段の格好で行くほうがよっぽど楽なのに。」と思ったが、それは決して恥ずかしさをまぎらわすためではない。とにもかくにも、日本時間で20時30分、JAL16便で僕らは一路Vancouverへと向かった。

カナダ研修スタート

日付変更線・国境を越えたのにもかかわらず、あいかわらず雨がぱらついている。現地時間で13時30分頃、僕らは無事にVancouver国際空港へ

と降り立った。荷物を受け取ってロビーにでると、今回の僕たちの研修ガイドをしてくれるKathrynが迎えに来てくれていた。彼女はAET(英語指導助手)として、3年間ほど静岡県に滞在していたことがあり、ある程度は日本語でコミュニケーションすることができた。

バス乗り場には、5月から7月までの間拓大に来ていたClaytonとKeithが待っていたが、やはり久しぶりに友人と会えるというのは嬉しかった。貸し切りバスに全員乗り込んで、AbbotsfordのUCFVまで約1時間半の道のりをKeithと話ながら過ごす。他のみんなは時差ボケと長旅の疲れのせいか、ぐっすり眠ってしまっていた。UCFVに着くと、それぞれ迎えに来たHost familyの車に乗って家へと向かい、とりたててセレモニーがあるわけでもなく、あっさり僕たちのCANADA研修はスタートした。

くつろぐホームステイ

Keithの家は学校から車で10分位の小高い丘の中腹にある、周りを豊かな緑に囲まれた閑静な住宅街であった。お父さんのGeorgeは農業機械の整備士をやっていて、お母さんのMaryは市内の病院に看護婦として勤めていた。お姉ちゃんのKathreenはVancouverにあるラジオ局のアナウンサーをしているのだが、同居しているわけではない。

お母さんは大体帰りがいつも20時位なので、夕食の支度はお父さんとKeithが手分けしながらやっていた。大男が2人もキッチンで動き回っているのを見ているのは滑稽であったが、家事を含む仕事の上での男女差別がまったく存在しないこの国では極めて当たり前の光景なのであろう。事実、僕が毎日学校に持っていくlunchは、Keithが毎朝作ってくれていた。水道水はそのまま飲めるといっていたが、蛇口にろ過器がついていて、飲むときはその装置をいじってから飲むようにするといいいよ、とお父さんが教えてくれた。

この夜、Keithの案内で早速市内の飲み屋に出掛け、彼の友達であるドイツから来ている留学生4人と一緒にお酒を飲む。Strawberryなんたらとい

うお酒を飲んだが、大ジョッキ1杯が2ドルだった。店は若者でごった返していたが、僕以外は全員白人で、結構緊張した。家に帰って来たのは夜中の0時過ぎだった。

通訳は誰だ？！

昨日の今日だというのに、早速ESL(English as a Second Language: 母国語ではない、第二言語としての英語)の授業が始まる。朝9時からの授業は時差ボケが解消できていない身にはかなりこたえる。担任のJon Shanksは、牧場の親父がそのまま学校の先生になったような、優しさが体中ににじみでているような、そんな先生で、僕たちと話すときも出来るだけゆっくり、そして簡単な単語を使って話しかけてきてくれた。それでも、僕らの仲間の内の何人かは、間違えることをよっぽど恥ずかしく感じる(ほとんどの日本人が子どもから大人になる過程、おもに学校や塾で知らず知らずのうちに身につけてしまう、虚栄心によく似た羞恥心)らしく、自分が伝えたいと思っていることを、うまく言い出せないでいた。けれど、何日かすれば、そういう事も徐々に無くなってくと思う。

午前中の授業が終わると、場所を移して僕たちの歓迎会を兼ねた昼食を大学側が用意してくれていた。会場にはAbbotsford市長や、UCFVのお偉いさんも来ていて、結構おごそかな雰囲気であった。もちろん、僕はジャージにサンダルだったけれど。パーティーにはKeithやClaytonも来ていて、なかなか楽しめそうだなあ~、と気楽に考えていたが、一体誰が通訳をするのかという話になると、ガイドのKathrynは「ダメ、自信ないネ」などと言い出すし、KeithとClaytonは

ニコニコしているだけなので、結局僕がその役目を務める羽目になってしまった。途中、いくつか分からない所はあったけれど、正直に「ごめんなさい。分かりません。」と言ったし、きちんと日本語として文章を整えてから言うことができたので、そこそこみんなの役には立てたのではないかな

あ～、と思う。何よりも、引率の先生 と思うと、心の中でガッツポーズを づく)
方にこれである程度デカイ顔が出来 せずにはいられなかった。(次号につ



愛しの敏江！～カナダからの手紙

ここで紹介する手紙の差出人リンダ・ブラウン（写真左）は、今年の5月から2ヶ月間フレーザー・バレー大学から拓殖短大にESLの教師として深川に滞在していました。

一方、手紙の宛先である池田敏江さん（写真右）は、カナダから来たメリッサのホストマザー（前号で紹介）でした。そのメリッサの母親がリンダの友人であったことから、メリッサのお別れパーティにリンダを招いたのが二人のお付き合いの始まりでした。

リンダ・ブラウンが帰国してから、一通の手紙が届きました。お二人のお付き合いの内容は、これから紹介する手紙の文面からおわかりいただけることと思います。

1997年8月3日

私の愛しの敏江さん！

最初に、あなたにすぐ手紙を書けなくてごめんなさい。帰国してからは、家のことでも仕事のことでもとても忙しかったのです。

次に、私は丁寧に手紙を書こうとしているのですが、実は乱筆家なので、この手紙を読むのにあなたはとても苦労すると思います。それでも大丈夫なのを願っています。

第三に、私はあなたと友達になれたことを感謝します。私が深川でとりわけあなたとあなたの家族と一緒に過ごした時間は、これからの私の人生の中でもすてきな思い出です。深川は今や私の第二のふるさとです。

カナダに戻ってきてから、深川での写真を見るたびに、ホームシックになり、涙を流してしまいます。私としては、あなたと過ごす時間がもっとあればよかったのと思いますが、あなたは私が居たら、もっと忙しくなるのでしょうか。

私がバンクーバー空港に到着したとき、娘が迎えに来ていました。娘に会えてとてもうれしく、私たち二人は泣きました。

私がいないうちに、私たちのオフィスが移ったので、引っ越しのために私のものを片付けるのに大変でした。また、仕事もとても忙しいのです。私たちが持つ学生はカナダの家族とともに住むために、あるいは観光に行くために2～4週間英語を学びます。先週の金曜日には55人の東京から来た高校生と彼らのホストファミリーのために「さよならパーティ」をしました。パーティの参加者は全部で260人でした！足の本当に痛かったこと、温泉に入れたらどんなにいいことでしょう！カナダはある面ではとても遅れていて、日本をうらましく思うことがたくさんあります。

昨晚私は息子と電話で話をしました。彼はまだマニラにいて、彼が言うには9月の2週間はわが家に居るとのことです。それから彼はジャカルタに3ヵ月滞在し、その後インドネシアのサレビヤ（Sarebya）に行きます。私と同じように、息子も外国で暮らすことが大好きなのです。

私は学んだ「少しの日本語」をもう忘れようとしています！！この大学には日本人の教師も学生も何人が居るのですが、勉強できるほどには彼らには会えません。来週私は深川市の代表団と4日間過ごすことになるでしょうから、それが私の日本語の勉強に役に立つかもしれません。市の代表団に会うのはとてもうれしいことです。また、今月末には拓大の学生に再び会えるので、興奮しています。私は帰国してから、カナダの留学生たち（グラハム、キース、クイントン、クレイトンは不在）に会いました。彼らもみんな深川のことを思ってホームシックになっています！！

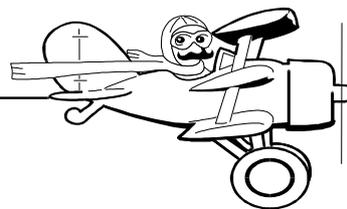
どうかパパと沙耶可と嵩太によく伝えてください。また、あなたの両親、あなたのお妹さんとそのご主人と双子にもよく伝えてください。敏江、あなたにはとくによくと言いたいです。

すぐ手紙を書いてね。

愛する敏江へ

リンダより

募集しています！



◎「ホストファミリー」……現在 38 家族の方が希望しています。

《1997 年 4 月から 10 月までの期間に、外国人を受け入れたホストファミリーの方々を紹介します。（順不同）》

板倉明子さん・坂本龍彦さん・宇野富美子さん・三井隆博さん・中本恵才さん
木下 厚さん・松本佳巳さん・前田暢智さん・轡田光章さん・滝口八代八さん
北本清貴さん・高桑 清さん・渡辺 優さん・小滝 聰さん・鹿島 稔さん
福井郁郎さん・東出治通さん・笠羽洋一さん・藤岡順子さん・岩本博明さん
清水 勇さん・池田政博さん

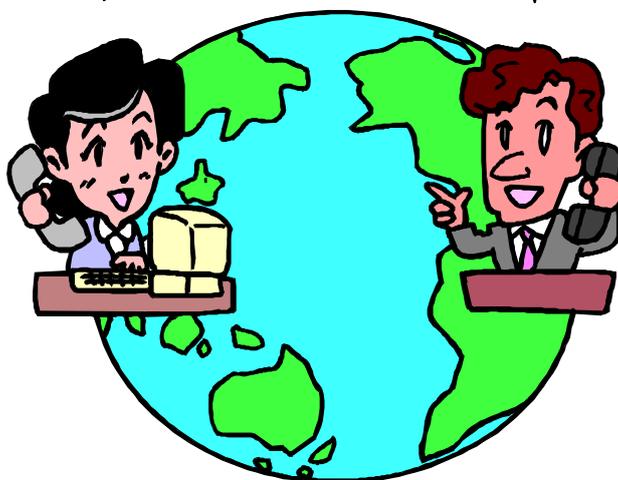
◎「通訳・翻訳ボランティア」…現在 21 名の方が希望しています。

◎「深川国際交流協会会員」……現在、一般会員は 107 名、賛助会員 58 団体です。

【問い合わせ先】

深川国際交流協会事務局（深川市企画課） ☎26-2215

世界に発信する深川地球市民



【編集担当】

深川国際交流協会 企画広報部会 広報編集委員会

編集長：南部雄二 副編集長：寺下良一

編集委員：池田敏江・上垣由紀子・橋本 信・高橋保之・谷口保幸